Miyazaki Women's Junior College

『源順集』斎宮関係歌注釈

原田真理

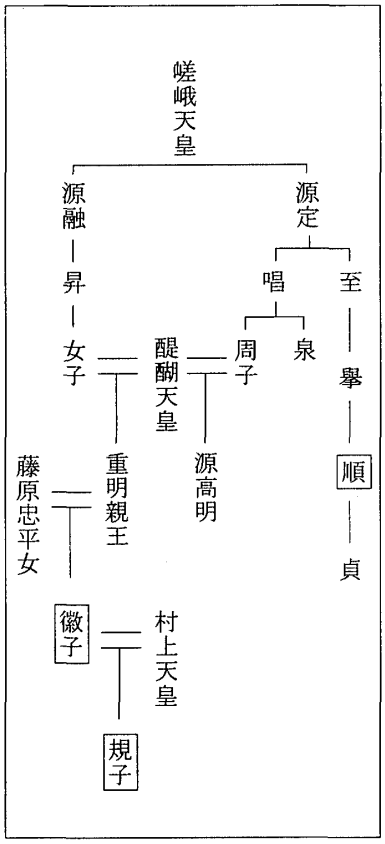
本稿は、『源順集』（国歌大観第三巻所収）中の、斎宮に関連する歌を注釈したものである。『源順集』には、斎宮のもとでの詠として、一六三番歌とその歌序、二五六番歌、二五七番～二五九番歌までの三首の贈答、二七二番歌、計六首が収められている。このうち、二五六番歌の詞書には「貞元元年」「侍従のくりや」とあり、この歌が貞元元年に初斎院へ入った規子内親王のもとで詠まれたものであることがわかる。この歌に続く二五七からの三首の贈答も、同じ場所での詠、二七二番の詞書には「伊勢規子斎内親王の群行ののち」とあり、これも規子内親王のもとでの詠である。一六三番歌は「伊せのいつきの宮」とのみ記されており、斎宮の特定はできない。しかし、十月二十七日が庚申にあたっていることを考えると、ここも規子内親王関連である規子内親王と推定できる。規子内親王家での順の和歌活動を示すものとしては他に「女四宮前栽歌合」があり、『源順集』にもその記録が収められている。この中で順は「宮のおもと人」とされており、親しく出入りしていたことがうかがえる。

『源順集』や順の漢詩文によれば、彼が特別親しく出入りすることができた貴顕は限られており、ほとんど源高明と規子内親王のもとだけといってよいと思われる。系図に示すごとく、どちらも嵯峨源氏につながる人々であった。順にとってこれらの人々のもとに近侍することは、血縁による栄達の手段であるとともに、名誉ありの誇りでもあったにちがいない。

規子内親王は村上天皇の女四宮、母は徽子女王である。天暦三（九四九）年出生、天延三（九七五）年斎宮に卜定され、貞元二年（九七七）年群行、永観二年（九八四）年譲位により斎宮交替、寛和二（九八六）年五月十五日、三十八歳で薨じている。

母の徽子女王は延長七（九二九）年出生、父は醍醐天皇皇子三品重明親王、母は太政大臣藤原忠平女である。承平六（九三六）年斎宮となり、天暦二（九四七）年村上天皇のもとに入内した。斎宮女御、承香殿女御とも呼ばれる。規子内親王の伊勢下向に同行した。順の規子内親王家への接近が許された背景には、徽子女王の意向があったものと考えられる。

関係系図



NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

はじめの冬かのえさるのよ、伊せのいつきの宮にさぶらひて、松のこゑよるのことにいるといふだいしてたてまつるうたの序

伊せのいつきのみや、あきののみやにわたりたまひての後の、冬の山風さむく成りて、はじめはつかなぬかのよ、かのえさるにあたれり、ながながしきよを、つくづくとやはあかさんとおもほして、みすの内にさぶらふおもと人、みはしの本にまゐるまうち君たちに歌よませあそびせさせ給ふ、うたのだいにいはく、松のかぜよるのことにいる、これにつけてきけば、あし引の山おろしにひびくなる松のふかみどりも、むば玉のよはにきこゆることのおもしろさも、ひとつにみなみだれあひ、ゆきかよひて、むべもむかしの風松にいるといふことのしくを、つくり置きそめけんとなんおもほえける、したがふがかしらのふぶきは、夏冬もわかぬ雪かとあやまたれ、心のやみは、からにもやまとにもすべてつきなく、おまへのやり水にうかべるのこりの菊におもひあはすれば、いづみばかりにしづめる身はづかしう、名にたかきぬがさをかにてるもみぢばを見わたせば、かかるまとゐにさぶらふことさへまばゆけれど、さもあらばあれと、人こそききて、そしりわらはめ、かけまくもかしこきおほんかみは、あはれともめぐみさきはへたまひてんとて、いにしへを見るがごとく、こよひの事を後の人も見よとて、かきしるしてたてまつるは、おほせごとにしたがふなり

〔語釈〕○はじめの冬＝陰暦十月。十・十一・十二月が冬にあたる。「孟冬之月」（『礼記』月令）○かのえさるのよ＝庚申の夜。庚申の夜寝ていると、体内にいる三尸虫が天に昇りその人の悪事を天帝に告げ、命を奪われるとされていた。人々は管弦の遊びや物語などをしながら、夜明かしをした。○伊せのいつきの宮＝伊勢斎宮。ここでは、村上天皇皇女規子内親王。天延三(975)年二月二十六日ト定、野宮に入ったのは貞元元年九月二十一日、翌年九月十六日群行。この序の初めに「秋、野宮に渡り給ひての後の……」とあるところから、ここは場所としての伊勢の斎宮ではなく、斎宮である規子内親王の御前の意味である。規子内親王の伊勢下向には母である徽子女王も同行している。この野宮においても行動をともにしていると考えてよいであろう。○ののみや＝野宮。斎宮に卜定された皇女が宮中の初斎院で潔斎したのち、さらに潔斎のため一年間こもるために作られた仮の宮殿。京都の嵯峨にあった。規子内親王が野宮にいた期間である貞元元年十月二十七日は庚申にあたる。グレゴリオ暦では、十一月二十一日である。この時、規子内親王二十八歳、徽子女王四十八歳、順六十六歳であった。○ながながしきよをつくづくとやはあかさんと＝規子内親王の、眠るわけにいかないこの長い夜を、なにもせず無為に過ごしてよいものか、なにか風流な催しで過ごしたいというお考えで。「つくづくと」＝じっと静かに。もの寂しげに。○おもと人＝高貴な人に仕える人。ここでは、規子内親王および徽子女王に使える女房たちを指す。○みはし＝御階。野宮の御殿の階。○まうち君たち＝「まうち君」は「まへつきみ」の転。天皇の御前に伺候する人を尊敬して言う語。公卿、廷臣。「たち」は異類複数を表す接尾語。ここでは、野宮の斎宮の御前に伺候している男性で、比較的身分の高い人々を指す。徽子女王の兄弟である源中邦正、行正、信正らか。邦正は、徽子女王を同じく忠平女を母とし、従四位下侍従、左京太夫。○『松の声、夜の琴に入る』＝歌の題。「松声」については、「不見其底虚聞松声」（『高唐賦』）、「寒潮添井味遠漏帯松声」（『鄭巣詩』）、「幽居無一事臂聴松声」（『陸游

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

詩』）などがある。○これにつけてきけば＝この歌題に関連付けて、松風や琴の音をきくと。○あしひきの＝「山」にかかる枕詞。○山おろし＝山から吹き降ろす激しい風○ひびくなる＝響くらしい。響くような。カ行四段活用動詞「響く」終止形＋伝聞推定の助動詞「なり」連体形。○松のふかみどり＝松の常緑を讃える。「ふかみどり常盤の松の陰にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ」（後撰和歌集　四二　坂上是則）○むば玉の＝「夜」にかかる枕詞。○むべも＝「むべ」は、下の句の内容に同意する意。なるほど、いかにも。「も」は強意の係助詞。○風松にいる＝「風入松」（『風俗通』河間雑歌二十一章）○かしらのふぶき＝頭髪が白髪になった状態。○あやまたれ＝タ行四段活用動詞「過つ」未然形＋自発の助動詞「る」連用形。○心のやみ＝「やみ」は、愚かで道理のわからない意。○からにもやまとにも＝唐におけるものも日本におけるものも。漢詩文にも和歌にも。○つきなく＝形容詞「つきなし」。頼りない。不案内だ。ふさわしくない。○おまへ＝御前。ここでは、規子内親王とその母徽子女王の御前を指す。○やり水＝遣水。庭に水を導きいれて造った流れ。○のこりの菊＝残菊。九月九日の重陽の節句を過ぎて咲いている菊。ここでは、十月末に咲いている菊。○いづみばかりにしづむ身＝和泉守程度に低迷するわが身。「おまへのやりみずにうかべるのこりの菊」と対応する。和泉守は従五位下相当。順は庇護者である高明の失脚に伴い、天禄元(970)年和泉守の任を終えてから散位であった。この貞元元年は、順の散位生活六年目にあたる。この後ようやく能登守に任じられたのは天元二(979)年である。この間、「いづみばかり」に類似する表現が順の詩歌に多く見られる。○なにたかき＝名に高き。評判の。○きぬがさをか＝衣笠山。山城国葛野郡、現在の京都市北区と右京区との境、大北山南端の一峰。○まどゐ＝集会。宴会。○まばゆけれど＝形容詞「まばゆし」巳然形＋接続助詞「ど」。貴人の風流な催しが「まばゆし」（目がくらむほど華やかですばらしい）意と、その席に不似合いな自分が「まばゆし」（恥ずかしい）意。○さもあればあれ＝ままよ、どうとでもなれ。○かけまくもかしこき＝言葉にするもおそれおおい。○おほんかみ＝御神。神様。○さきはへたまひてん＝ハ行下二段活用動詞「幸はふ」連用形＋尊敬の補助動詞「給ふ」連用形＋推量の助動詞「む」終止形。「幸はふ」は、幸福を与える、栄えさせるの意。○いにしへをみるがごとく、こよひの事を後の人もみよ＝今我々が古を見るように、今夜のこの催しのことを後代の人も見よ。「歌のさまを知り、事の心を得たらむ人は、大空の月をみるがごとくに、古を仰ぎて今を恋ひざらめかも」（『古今和歌集』仮名序）○おほんこと＝御言。斎宮のお言葉。○したがふなり＝斎宮のお言葉に従って記すのは順である。「従ふなり」と「順なり」の掛詞。

〔現代語訳〕

十月庚申の夜、伊勢の斎宮様の御許に伺候して、「松の声、夜の琴に入る」という題で奉る歌の序。

伊勢の斎宮様がこの秋野宮にお移りあそばした後、冬の山風が寒くなってきた初めの冬十月二十七日の夜は、庚申にあたりました。宮は、この長々しい夜をただ何もしないで過ごして良いものかとお思いあそばして、御簾の内に伺候している女房や、御階のもとにおられる君たちに歌をお詠ませになり、また管弦の遊びをなさいました。その歌の題にいうことには、「松の風、夜の琴に入る」。これによって聴きますと、まさに、山から吹き降りてく

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

る風に応えるような深緑の松が奏でる松籟も、この暗い夜に響いてくるすばらしい琴の音も、すべてがみな一つに乱れあい溶け合って、なるほど昔の人も「風松に入る」という詩句を作り置いたのだなあとしみじみ思われるのでございました。順の頭においた吹雪のような白髪は夏も冬も区別のない雪かとまちがえてしまうほどであり、才知の乏しさから漢詩文にも和歌にもうとく、御前の遣水に浮かんだ残菊に思い比べると、同じく時過ぎた身ながら、和泉守程度で沈淪するわが身が恥ずかしく、あの有名な衣笠山に照り輝く美しい紅葉を見渡すように、ご列席のすばらしい皆様を拝見しますと、このような晴れがましいお集まりに参上することすら恐れ多い気持ちがいたしますが、「ええままよ。世間の人こそ、このことを聞いて私のことを分をわきまえぬ奴と嘲り笑うだろう。けれども、申すも恐れ多い大御神は、こんな私をきっと哀れにおぼしめして、お慈悲をかけてくださり幸せを賜るにちがいない」と存じまして、今我々が古の風流事を知ることができるように、今夜の催しを後世の人もはるかに見るようにと、このように書き記して差し上げるのは、宮の仰せごとにしたがって順なのです。

一六三よを寒みことにしもいるまつ風は君にひかれて千代やそふらん

〔語釈〕○よを寒み＝夜が寒いので。「み」は理由をあらわす助詞。○ことにしも＝琴に。殊に。「しも」は、強意の助詞「し」「も」と「霜」との掛詞。○君にひかれて＝「引かれて」と「弾かれて」の掛詞。○千代やそふらん＝さらに千歳の寿命が加わるでしょう。

〔現代語訳〕

夜が寒いので霜が降りるような今宵、常盤の松を吹く風は特別に琴の音に溶け合ってあなた様に弾かれ、あなた様のご長寿に引かれてさらに千歳の齢を加えることでしょう。

【参考】拾遺和歌集

野宮に斎宮の庚申し侍りけるに松風入夜琴

といふ題を詠み侍りける　　斎宮女御

四五一琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをより調べそめけん

四五二松風の音に乱るる琴の音を聞けば子日の心地こそすれ

貞元元年、初斎宮侍従のくりやに御坐するあひだ、八月廿八日庚申のよ、人人あそびによむ、いはひのこころ

二五六神代より色もかはらで竹がはのよよをばきみぞかぞへわたらん

〔語釈〕○貞元元年＝規子内親王が初斎院に入ったのは、貞元元(976)年二月二十六日であった。「廿六日癸亥、伊勢斎王禊。遷坐侍従厨家」（『日本紀略』）○初斎宮＝初斎院。斎宮に卜定されると、宮中に潔斎所が設けられ、そこで野宮に移るまでを過ごした。この場所を初斎院と呼ぶ。規子内親王の場合、初斎院は侍従厨に置かれた。侍従厨は、大美福門を入った右にあった。○八月廿八日庚申のよ＝貞元元年八月二十八日は庚申であった。ちなみにこの年の庚申にあたる日は、二月二十三日、四月二十四日、六月二十五日、八月二十六日、十月二十七日、十二月二十八日である。十月二十七日の庚申の夜については、一六三番の歌序参照。○あそび＝詩歌管弦のあそび。○竹かは＝竹川。伊勢の斎宮近くの川。またそのあたりの地名。現在の三重県多気郡明和町。○よよ＝

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

「世々」と「節々」との掛詞。「節」は「竹」の縁語。

〔現代語訳〕

貞元元年、斎宮様が初斎院においでになる間の、八月二十八日の庚申の夜、人々が歌を詠んで遊びました折に祝いの心を神代の昔から色も変わらない竹のように、竹川の地で、竹の節々ならぬ世々を重ねてお栄えになることでしょう。

おなじ九月はつる日、斎宮、野のみやの御前に前栽うゑて又よむ

二五七たのもしなののみや人のうゑる花時雨るる月にあすはなるとも

〔語釈〕○おなじ＝前歌と同じ貞元元年。「（貞元元年）九月廿一日甲申。伊勢斎宮従侍従厨禊東河」（『日本紀略』）。○たのもしな＝期待されるなあ。「な」は、詠嘆の意を表す終助詞。○時雨るる月＝十月。時雨は冬の雨として、十月の雨を指す。「時雨ふる神無月こそちかからし山のおしなべ色づきにける」（古今和歌六帖　二〇一　紀貫之）

〔現代語訳〕

同じ年の九月三十日、斎宮様が野宮においでの御前に前栽を植えて、人々がまた歌を詠む。

楽しみだなあ。野宮にいらっしゃる方々がお植えになる花は。明日は冬の到来を告げる時雨降る十月になるのだけれども、この花はきっと美しく咲くことでしょうよ。

この歌の返事、女房

二五八あすよりは時雨にかかる花をうゑてのべやるべくもあらぬ秋かな

〔語釈〕○あす＝十月一日。○かかる＝「懸かる」と「斯かる」の掛詞。○のべやるべく＝「延べ」と「野へ」との掛詞。「野」は「花」の縁語。

〔現代語訳〕

この歌の返し　女房

明日からは時雨にあうというのに、このような花を植えましたわ。こうしてみたところで、やってくる秋を先延ばしにして野原へやってしまうことなどできませんのにね。

かへし

二五九君がためことしの秋はなければやのべやるべくもあらずといふらん

〔語釈〕○秋＝「飽き」の掛詞。○のべ＝「延べ」と「野辺」の掛詞。

〔現代語訳〕

返し

あなたには今年「飽き」などということはありませんので、もともとない「秋」を先延ばしにしたり野へやったりすることはできないというのでしょうよ。

伊勢規子斎内親王の群行ののち、かへるあしたに、斎王の御前にて饗禄等たまふに、男女うたよむにたてまつる

二七二神のます山田の原のつるのこはかへるよりこそ千代はかぞへめ

〔語釈〕○群行＝斎宮が野宮を出て、伊勢へ下向すること。貞元二

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

年九月十六日「伊勢斎宮規子内親王従野宮禊西河。参向伊勢斎宮」○かへるあした＝長奉送使一向が京へ帰る朝。彰考館本順集詞書には「長奉送使ひろわたの中納言京にかへり給ふあした」とあり、諸本「広幡中納言」と記すものが多い。広幡中納言は、藤原顕光。長奉送使は、斎宮が伊勢大神宮に下向するとき、野宮から多気の宮まで送った勅使。○饗禄＝「饗」は、酒食を用意し、もてなすこと。「禄」は、ほうび、引き出物。○山田の原＝伊勢外宮の鎮座地。○つるのこ＝鶴の卵。鶴は千年の長寿の象徴とされた。○かへる＝「孵る」と「帰る」との掛詞。

〔現代語訳〕

伊勢の斎宮でいらっしゃる規子内親王の群行ののち、長奉送使御一行の方々が京へ帰られる朝、斎宮様の御前で饗を給い禄をくださる。そのときに男女が歌を詠んだので、その折に差し上げた歌

神のましますこの山田の原に生まれる鶴の卵は、孵る時から千代を数えることになります。皆様方も、この地から京へお帰りになるこの時から、新たに千歳の齢をお加えになることでございましょう。

NII-Electronic Library Service